

平成 26 年 9 月 17 日

報道関係者 各位

島原城天守閣復元 50 周年記念事業

島原謡曲「白雀」の復曲にむけての稽古について

島原にかつて存在した郷土能「白雀（はくじゃく）」。

長年途絶えていたが、今年の島原城天守閣復元 50 周年に合せ、島原宝生流の方々が復曲に向け取り組んでおられ、来る島原城薪能の舞台で披露するため、下記のとおり稽古が行われますのでお知らせします。

記

場所 森岳公民館（101、102）

日時 平成 26 年 9 月 20 日、9 月 27 日、10 月 4 日、

10 月 11 日、10 月 18 日

毎週土曜日 午後 2 時

第 1 回目の 9 月 20 日は、島原城天守閣復元 50 周年記念事業実行委員会委員（松尾、北田）が取材対応可能です。



有明海にひらく湧水あふれる
火山と歴史の田園都市 島原

担当：しまばら観光おもてなし課

観光施設班 森松

電話：0957-63-1111（内線 216）

E-mail：r-morimatsu@city.shimabara.lg.jp

(2014.9.13) rewrite 島原謡曲「白雀」

松尾 卓次（島原城）

1、白雀の乱

島原にも郷土能がある。それが「白雀」で、長年途絶えているが今秋には復活しそう。島原宝生流の人たちが見出して舞台に乗せようと稽古中という。楽しみだ。

この謡曲「白雀」は白雀の乱を素材とする。霊場温泉山の全僧院を巻き込んだ大争乱を取材してまとめたもので、郷土色豊かな作品である。その成立や上演の記録は不詳だが長く島原で郷土謡曲として伝えられてきたもので、その能本を島原宝生流の人たちが所有している。今回これを上演しようとの試みである。

温泉山霊場は、大宝元（701）年に行基上人が温泉山大乗院満明寺を開いた時から始まる。やがて寺方 352、寺領が肥前・肥後領国 4 郡内に 1,530 町といわれた。御山に温泉社（四面宮）を祭り、末社として山田、有江、千々石、伊佐早の分霊社が置かれた。

一時兵火により満明寺は焼失するが、この再建資金として肥前国内 1 町毎に銭 100 文を課して再興する。しかしまた焼失しておよそ 150 年間廃寺となったが、1115 年に定僧上人が再興して賑わいを取り戻す。瀬戸原（今の札の原）300 坊、別所 700 坊と言われ、僧舎千軒が並んでいた。30 カ国から奉納の寺領は 2 万 4820 町にも及ぶ。

その霊場で、世にいう「白雀の乱」が起こる。たわいのない稚児の喧嘩から始まった。別所の僧房にいた稚児の学一丸が白い雀を飼っていたが、温泉の稚児宝寿丸が誤って殺してしまう。それで喧嘩となり、やがて別所・温泉双方の僧が衝突、全山挙げての大乱闘となる。領主有馬氏の兵が出兵して治めるが、数多くの宿坊が焼失する。これをきっかけに歴史ある霊場が衰退への道を進む。打ち続く戦乱とキリスト教による圧迫、また僧侶の墮落と抗争が白雀の乱に見られる混乱を引き起こすのである。その結果、温泉山霊場が衰退して行く。

島原の乱後、高力忠房の島原領内復興策の一つに神仏崇拝を取り上げて、寺社の再建と保護に力を入れるが、往年の輝きは取り戻せなかった。

島原の歴史上有名な出来事であるから謡い続けられたものであろう。また今でも稚児落としの滝とその伝承が雲仙には残っている。

2、謡曲「白雀」

登場人物 シテ（温泉の翁）、ワキ（旅の僧）、後シテ（学一丸）、ツレ（桜若）

場所 温泉山（雲仙） 出典 島原地方の伝承「白雀の乱」

「行く方何国と不知火の筑紫の果てを尋ねん」と、ワキが登場して謡曲「白雀」が始まる。ワキは諸国行脚の僧で、大宰府に参籠して長崎へ立寄り、日本の果てを一見したい、「音に聞こえし温泉山に着き、暫く景色を眺めたい」と謡う。

シテが登場して、里遠き山に住みなれてと、温泉山に住む我が身を語る。

ワキはシテと出会い、この老人に尋ねる。

シテ「見慣れぬ人よ、何国よりの御参詣か」

ワキ「都の者で、当所は初めてで、これは何たる御神か」と問う。

シテは、当山鎮守四面の御宝宮と答える。また問われた地獄の話をして、「ここに湧き出るのは白雀の地獄と申す、良く御覧候へ」

ワキは、罪人が落ちるはもつともだが、「小鳥が何で悪心有りて苦界に沈むのか」と問う。

シテは、いわれを語り、行基上人が開いた温泉山霊場のこととその賑わい。そこで起こった白雀をめぐる稚児の争いと全山を巻き込む争乱。そして満山一字もなく灰燼となり、その後地獄が湧き出て、それを雀地獄の名付けたこと。などを語る。

シテはさらに答えて、白頭の翁と名乗る。

後シテ、ツレのかけ合いとなって、学一丸と桜若が白い雀をめぐる争いで差し違いとなり奈落の底に落ちる。二人のために満山の衆徒がたちまち合戦となつてと、謡い続ける。

シテ「浅ましや我ら故に三日三夜の戦いに、焰は盛んに燃上がり、満山片時の煙となり、明け行くままに夢覚めて、これまで成りや旅人よ。慙愧懺悔の結縁に、無量の罪はばらばらと消滅して、仏果に至る有難さよ」と謡い、終る。 （「高来の雫」より）